

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：杉本 守（教育心理学コース）

■ 研究題目
情緒応答性と他者意識及び子ども観の関連の検討 —表情認知における親と未婚者の対比から—
■ 研究代表者・分担者 氏名
杉本 守（教育心理学コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
1. 問題と目的 近年、男性の育児休業取得率の上昇が報告されるなど、育児に参加する父親は珍しい存在ではなくなってきた。しかし、一般的に二次的養育者であるとされることの多い男性は、子育てに関する研究で扱われることが依然として少なく、男性の具体的な育児能力の発達についての知見が蓄積されているとは言い難い。また、近年では父親が子どもと一緒にいる時間が長いほど良い影響があるという考え方は支持されず、父親が子どもと過ごす時間の長さに単純に注目するよりも、父親と子どもの相互作用や関係の質に注目する重要性が指摘されている（Pleck, 2010）。つまり、今までは父親が育児に参加することが重要とされていたが、これからは子どもとの相互作用の質の高さにつながる育児能力に着目する必要がある。そこで本研究では、男性の育児能力として情緒応答性を取り上げる。情緒応答性は「母子相互作用における乳児の情緒への気付きと共感的な反応及び母親の情緒提供という一連の応答能力」（Emde & Score, 1983/1988）と定義され、sensitivity の概念を基礎としつつ、養育者と子どもの関係性の特徴という側面と情緒という側面に焦点化した概念である（Bretherton, 2000）。また、情緒応答性はアタッチメントに特化したネガティブな感情だけでなく、ポジティブな感情も含めた養育者と子どもとの間での情緒的な相互作用を重視している（Emde & Easterbrooks, 1985）ことが sensitivity 概念とは異なる特徴といえる。情緒応答性の把握には日本版 IFEEL Pictures（井上ら, 1990）（以下、「JIFP」）を用い、情緒応答性の認知的側面である情緒シグナルの認知に着目する。 男性の情緒応答性の認知的側面の発達に関し、先行研究では非婚者と親の違いは検討されているものの、発達を促す要因については検討されていない。杉本（2022）では、

父親は非婚男性よりも基本的情緒の読み取りが有意に少ないことが示され、乳児の表情を単なる感情の発露と捉えるのではなく、表情から養育に必要な情報を読み取るように解釈が変化することが示唆された。また、非婚男性の情緒応答性と乳幼児との接触経験に関連が見られることも報告されている。このように、親になり我が子の養育を行うという経験が情緒応答性の発達に影響することは先行研究から示唆されている。しかし、情緒応答性の発達と関連する要因については明らかにされていない。また、非婚男性では情緒応答性と乳幼児との接触経験に関連が見られたものの、この結果は単相間を確認したに留まり、他の要因は検討されていない。このように、男性の情緒応答性の発達がどのように促されるかは明らかにされていない。そこで本研究では情緒応答性と関連する要因を検討する。

男性の情緒応答性の発達に関連する要因としては、育児関与の程度、乳幼児との接触経験、養護性が考えられる。育児関与の程度については、育児関与の多い父親は少ない父親よりも sensitivity が高く (Atzaba-Poria et.al, 2010)、生後 2 ヶ月から 4 ヶ月にかけて sensitivity が上昇している父親は、授乳や着替えといった育児行動を多く行っていた (小山他, 2014) など、育児関与の程度と子どもの情緒シグナルへの感性の関連が指摘されている。このことから、遊びや世話といった直接的な育児行動の多さと表情の解釈は関連すると考えられる。また、親になる前に乳幼児とかがかわることが親性といった親としての資質・能力を高める (岡本・古賀, 2004) ことや、親になる前の養護性と親となった後の子どもへの応答性や感性と関連する (小嶋, 1989) ことが報告されている。すなわち、我が子という特定の相手ではなく、親になる前の子どもとのかかわりや、子ども一般に対する関心やかかわりの技能が、親になった後の我が子への情緒応答性にも影響すると考えられる。また、杉本 (2022) では非婚男性の情緒応答性と関連する要因として乳幼児との接触経験のみを検討していたが、養護性や養護的な行動は親となる前から発達する (小嶋, 1989) ことから、非婚男性においても子どもに対する敏感さや応答に関与する養護性は情緒応答性と関連すると考えられる。

以上から、本研究では男性の情緒応答性の発達に関連する要因として、父親の育児関与、乳幼児との接触経験、養護性を取り上げ、非婚男性と父親それぞれに情緒応答性との関連を検討する。

2. 方法

(1) 対象

対象者は 20 歳から 29 歳の非婚男性 52 名、第一子が 24 ヶ月未満の父親 30 名の計 82 名であった。平均年齢は、非婚男性が 26.11 歳 (± 2.15 , 21 歳～29 歳)、父親が 30.63 歳 (± 5.24 歳, 25 歳～50 歳) であった。また、第一子の月齢の平均は 11.24 ヶ月 (± 5.98 , 0 ヶ月～20 ヶ月) であった。

(2) 手続き

研究協力者に対し、個別に JIFP を実施した。なお、実験は対面で行わず、オンライン会議システム (Zoom) を用いて実施した。また、JIFP 終了後に質問紙調査を実施した。質問紙調査はアンケート作成ツール (google forms) を使用し、オンライン上で回答を求めた。なお、実験は 2022 年 10 月中旬から 2022 年 12 月上旬にかけて実施した。

(3) 情緒応答性の把握

①材料

日本版 IFEEL Pictures

②JIFP の実施

実施にあたっては、回答者 1 名に対して検査者 (男性) 1 名が個別に JIFP を実施した。実施の際は画面共有機能を用いて JIFP を回答者の端末に表示し、「ここに赤ちゃんの表情を撮った写真が 30 枚あります。この写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くてはっきりしている感情、情緒はどんなものでしょうか。心に最初に浮かんだ言葉をそのままできるだけ 1 つの単語で教えてください。回答には正しいとか間違っているというのはありませんから気楽にやってみてください」と教示し、自由に回答するよう促した。得られた口述反応は検査者が逐語的に記録した。

(4) 回答カテゴリーの分類

①関係性評価カテゴリー

長屋他 (2008) によって開発された関係性評価カテゴリーを用いる。具体的な分類の基準は表 1 の通りである。なお、本研究では 30 枚の表情写真に対する自由反応を 1 枚ずつ分類し、各カテゴリーの反応数を得点化した。

②質的分类

小原 (2010) を参考に、写真刺激に対する自由回答を表情焦点型と文脈焦点型に分類する (表 2)。なお、本研究では文脈焦点型の読み取りの枚数を文脈焦点読み取り得点とした。

(5) 質問紙

①フェイスシート

年齢、第一子の月齢 (父親のみ)。

②父親の育児関与 (父親のみ)

森下 (2006) の作成した父親の育児関与尺度の「子どもとの遊びや世話」の下位尺度 6 項目を、24 ヶ月未満の子どもの世話場面に適応するように修正して使用した。回答は

5件法で求めた。6項目のCronbachの α 係数を算出したところ $\alpha=.75$ であったため、十分な内的整合性があると判断し、6項目の回答得点を加算し項目数で割った値を父親の育児関与得点(M=4.04,SD=0.59)とした。

表1 関係性カテゴリー（長屋他，2008を参考に作成）

カテゴリー名	定義	反応例
D 逸脱	12ヶ月児としては不適切な感情。過剰な明細化・特殊化。逸脱した言語表現。刺激凶犯から離れた反応。	親の様子をうかがっている、企んでいる、強い警戒心、強い恐怖心
OS 対象希求	子どもが二者関係の中で感じている感情・情緒。相手の関心を引く行動。遊び相手として、あるいは聴衆・観衆として他者を求めている反応。	甘えている、行かないで、見てもらいたい、○○がいて嬉しい、遊んでほしい、かまってほしい、得意・自慢、「やったー」などの台詞、威張る、お茶目、おどけている、威張る
FN 欲求	子どもが要求・欲求を感じていたり、欲求が満たされない状況、理由を述べて否定的感情を説明する反応。	○○して欲しい、自己主張、わがまま、物を返してほしい、やきもち、いたずらしたい、うらやましい、むっとしている、駄々をこねている、我慢している、すねている、悔しい、不満
BE 基本的情緒	子どもの情緒を示す反応	嬉しい、怒っている、悲しい、楽しい、怖い、驚き、恥ずかしい、不安、人見知り、安心、安定、退屈、嫌だ、満足、興奮、ふざけている、落ち込んでいる、照れる
PS 生理	子どもの生理的な状態、及びそれに伴う快・不快感覚について述べた反応。	眠い、疲れた、おなかがすいた、痛い、寝起きでぼーっとしている、機嫌が悪い、気持ちがいい、気持ちが悪い、穏やか、あくび、おいしい
AC 思考・集中	子どもが一人で考えたり、集中して何かを行っている様子について述べている反応。	悩んでいる、困っている、考えている、一所懸命遊んでいる、集中している、疑問、反省、後悔、興味、好奇心、話を聞いている、面白い、不思議、じっと見ている
SD 状態	子どもの動作・表情の説明にとどまり、情緒について述べない反応。子どもの状態を説明する反応。	くしゃみをしている、(○○を)見ている、振り向く、ポーズを取る、泣いている、笑っている、ぼーっとしている、何も考えていない、普通の状態、おすまし
R	反応拒否	反応不能 反応拒否

表2 回答カテゴリーの分類（小原，2010を参考に作成）

分類	分類基準
表情焦点型	乳児の表情を解釈する際に、乳児の表情に焦点を当てて表情を解釈する
文脈焦点型	乳児の表情を解釈する際に、乳児の表情だけでなく、想定された前後の文脈に焦点を当てて表情を解釈する

③乳幼児との接触経験

花沢(1992)の作成した乳幼児接触経験尺度を、現代の状況と合わない項目を削除するとともに、表現を一部修正した13項目を使用した。非婚男性には18歳以降の経験、父親には18歳から第一子誕生までの経験を尋ねた。回答は3件法で求めた。Cronbachの α 係数を算出したところ $\alpha=.92$ であったため、十分な内的整合性があると判断し、13項目の回答得点を加算し項目数で割った値を乳幼児との接触経験得点（非婚男性：M=1.80,SD=0.51；父親：M=1.84,SD=0.56）とした。

④養護性

中西・栗津(1996)の作成した「養護性を測定する質問項目」のうち、父親には回答困難な項目を削除した22項目を使用した。この質問項目は「赤ちゃん・子どもへの興味」「子どもをうまく扱える自信」「積極的な養護役割の受容」の3下位尺度計22項目で構成されている。回答は3件法で求めた。下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、「赤ちゃん・子どもへの興味」では $\alpha=.73$ 、「子どもをうまく扱える自信」では $\alpha=.73$ 、「積極的な養護役割の受容」では $\alpha=.39$ であった。「積極的な養護役割の受容」は α 係数が低く、養育役割に対する状況も非婚男性と親で異なるため、本研究では使用しないこととした。「赤ちゃん・子どもへの興味」「子どもをうまく扱える自信」は十分な内的整合性があると判断し、それぞれの下位尺度の項目の回答得点を加算し項目数で割った値を赤ちゃん・子どもへの興味得点（非婚男性：M=2.54,SD=0.30；父親：M=2.70,SD=0.26）、子どもをうまく扱える自信得点（非婚男性：M=2.63,SD=0.30；父親：M=2.70,SD=0.41）とした。

3. 結果

(1) 父親における情緒応答性と各変数の関連

情緒応答性と各変数の関連について検討するために、まずは関係性評価カテゴリーの各カテゴリーの得点及び質的分類の文脈焦点読み取り得点と各変数との相関係数を算出した。関係性評価カテゴリーでは、逸脱、対象希求、欲求、基本的情緒、状態の5カテゴリーで有意な相関が見られた。逸脱では育児関与との間に中程度の負の相関($r=-.44$, $p<.01$)、乳幼児との接触経験との間に中程度の正の相関($r=.47$, $p<.01$)が見られた。対象希求と欲求では子どもをうまく扱える自信との間に弱い正の相関(対象希求： $r=.27$, $p<.05$ ；欲求： $r=.24$, $p<.05$)が見られた。基本的情緒では乳幼児との接触経験との間に中程度の負の相関($r=-.42$, $p<.05$)、子どもをうまく扱える自信との間に弱い負の相関($r=-.22$, $p<.05$)が見られた。状態では乳幼児との接触経験との間に強い正の相関($r=.61$, $p<.001$)が見られた。また、有意傾向であるが、基本的情緒で赤ちゃん・子どもへの興味との間に弱い負の相関($r=-.21$, $p<.10$)、生理では育児関与との間に弱い正の相関($r=.28$, $p<.10$)、状態では育児関与との間に中程度の負の相関($r=-.30$, $p<.10$)

が見られた。文脈焦点読み取り得点と各変数の間には有意な相関は見られなかった。また、変数同士の相関について確認したところ、赤ちゃん・子どもへの興味と子どもをうまく扱える自信の間に中程度の正の相関 ($r=.46, p<.001$) が見られた。

続いて、関係性評価カテゴリーの各カテゴリーの平均得点及び質的分類の文脈焦点読み取り得点をそれぞれ目的変数、育児関与、乳幼児との接触経験、赤ちゃん・子どもへの興味及び子どもをうまく扱える自信を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、逸脱では育児関与と乳幼児との接触経験が有意であった ($R^2=.30$; 育児関与: $\beta=-.46, p<.01$; 乳幼児との接触経験: $\beta=.38, p<.01$)。基本的情緒では乳幼児との接触経験が有意傾向であった ($R^2=.02$; $\beta=-.39, p<.10$)。状態では乳幼児との接触経験が有意であり、子どもをうまく扱える自信が有意傾向であった ($R^2=.30$; 乳幼児との接触経験: $\beta=-.59, p<.01$; 子どもをうまく扱える自信: $\beta=-.59, p<.01$)。なお、文脈焦点読み取り得点においては有意な説明変数を得られなかった。

(2) 非婚男性における情緒応答性と各変数の関連

情緒応答性と各変数の関連について検討するために、まずは関係性評価カテゴリーの各カテゴリーの得点及び質的分類の文脈焦点読み取り得点と各変数との相関係数を算出した。その結果、関係性評価カテゴリーでは、対象希求で子どもをうまく扱える自信との間に有意な正の相関が ($r=.35, p<.05$) 見られた。また、文脈焦点読み取り得点では有意傾向であるが、乳幼児との接触経験との間には弱い正の相関が見られた ($r=.24, p<.10$)。また、変数同士の相関について確認したところ、赤ちゃん・子どもへの興味と子どもをうまく扱える自信の間に中程度の正の相関 ($r=.32, p<.05$) が見られた。

続いて、関係性評価カテゴリーの各カテゴリーの平均得点及び質的分類の文脈焦点読み取り得点をそれぞれ目的変数、乳幼児との接触経験、赤ちゃん・子どもへの興味及び子どもをうまく扱える自信を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、対象希求において子どもをうまく扱える自信が有意であった ($R^2=.08$; $\beta=-.36, p<.05$)。なお、文脈焦点読み取り得点においては有意な説明変数を得られなかった。

表3 関係性評価カテゴリーの各カテゴリー得点を従属変数とした重回帰分析 (父親)

	逸脱	対象希求	欲求	基本的情緒	生理	思考・集中	状態	回答拒否
育児関与	-.46*	-.01	-.15	.04	.30	-.06	-.11	-.14
乳幼児との接触経験	.38*	.03	-.05	-.39 [†]	.08	-.19	.59**	-.01
赤ちゃん・子どもへの興味	-.23	.19	-.12	-.03	.06	-.51	.37	.08
子どもをうまく扱える自信	.26	.07	.47	-.08	-.02	.27	-.47 [†]	-.15
R^2	.30**	-.09	.00	.02	-.06	.01	.30*	-.11

注) [†] $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ 。

表 4 関係性評価カテゴリーの各カテゴリー得点を従属変数とした重回帰分析（非婚男性）

	逸脱	対象希求	欲求	基本的情緒	生理	思考・集中	状態	回答拒否
乳幼児との接触経験	.05	.08	-.11	-.08	.15	.08	.12	.21
赤ちゃん・子どもへの興味	-.03	-.09	-.02	-.13	-.04	.16	.13	-.01
子どもをうまく扱える自信	.22	.36*	.18	-.16	.11	-.21	-.08	.19
R ²	-.01	.08 [†]	-.03	.01	-.02	-.01	-.03	.04

注) [†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

4. 考察

(1) 父親における情緒応答性と各変数の関連

まず、父親の育児関与の程度は逸脱のみにしか関連を示さなかった。逸脱の読み取りの多さは育児困難といったケースが示唆されるものである。この結果から、育児経験を重ねることで乳児の認知環境を想定することが可能となり、過剰な意味づけを行うことが少なくなるとも推測できる。しかし、本研究でも逸脱の反応を示したのは2名のみであり、反応数もそれぞれ1枚にとどまっている。逸脱の読み取りがあった場合は詳細な内容分析を行うことが推奨されている（長屋，2009）ため、この結果から両者の関係を一般化することは難しい。また、「逸脱」以外の各カテゴリーと関連が見られなかった理由としては、父親の育児関与尺度の問題が考えられる。具体的には、使用した尺度が子どもの養育にかかわる育児行動全体を測定できていなかった可能性がある点と、育児関与の程度を主観的にしか把握できていなかった点である。前者について、本研究の尺度では育児で毎日行われるであろう排泄のケアや着替えについての項目は含まれていなかった。つまり、父親が主として行うことが想定される育児行動のみが取り上げられ、その多寡を尋ねる形となってしまっている。そのため、育児関与の多寡と情緒応答性の関連を十分に検討できていない可能性が考えられる。後者については、本研究では自分がどの程度育児にかかわっているかという自己認識を尋ねているため、例えば「よくしている」は毎日なのか、数日に1回程度なのかという「よく」の認識によって実際の育児関与の程度と齟齬が生じる可能性がある。よって、本研究の結果から述べるができるのは、自分がどの程度育児にかかわっているかという自己認識と情緒応答性の関連は認められないということに留まると考えられる。

また、乳幼児との接触経験は逸脱と状態で有意な関連を示した。この結果は、親となる前に乳幼児とかかわった経験が親となった後の情緒応答性と関連することを示唆するものである。ただし、本研究の結果は、乳幼児との接触経験が多いほど逸脱と状態の読み取りの多さを予測していた。逸脱の読み取りは育児困難といったケースが示唆され、状態の読み取りが多いと子どもの情緒状態に対する感受性の低さが示唆される（長屋，2009）。先行研究では、親になる前に子どもとかかわる経験は親となったのちに肯定的な影響を及ぼすとされていたが、本研究ではネガティブな影響が示唆された。この

結果について考察すると、逸脱に関しては、親になる前に乳幼児との接触経験を就学前の乳幼児を対象にしているため、1歳以上の子どもとかかわった経験から表情を解釈し、その結果1歳児には不適切な解釈をしている可能性もある。状態に関しては、本研究で状態に該当する反応は「笑っている」「泣いている」という読み取った表情を単純に述べているものから、「声をかけられて振り向いた」「カメラを見ている」など、前後の文脈や周囲の状況を想定しているものまで多岐にわたる。前者は表情の知覚のみにとどまっていると考えられるが、後者では表情から子どもの状況に関する情報を読み取っているとも言える。養育者は乳児の表情というひとつの視点のみではなく、乳児の表出行動と文脈を関連付けながら解釈し意味づけを行っており (Tronick & Brazelton, 1980)、杉本 (2022) において非婚者でも乳幼児との接触経験が豊富であればその傾向が強くなることが示唆されている。このことから、乳幼児との接触経験が豊富であるほど、親になる前の時期において文脈に関連する情報に焦点が向きやすくなるような認知特性が形成されている可能性もある。しかしこれらはあくまで推察の域を出ない。乳幼児との接触経験が情緒応答性と関連し、育児関与が関連しなかったという結果は、JIFP が日常生活における我が子との相互交渉の経験を喚起しなかったという可能性も考えられる。つまり、JIFP で用いられている表情写真から情緒を読み取ろうとした際に、我が子との相互交渉ではなく、我が子以外の子どもとかかわりの経験をもとに表情を解釈したということである。母親では JIFP の自由反応にも、我が子との相互作用によって形成された表情認知特性が反映されると考えられている。しかし、第一子誕生後に我が子とかかわる時間が長い我が子との経験が喚起されやすいが、子どもとかかわる時間が相対的に短い父親では、我が子以外の子どもとの経験も用いて表情を解釈するのかもしれない。

(2) 非婚男性における情緒応答性と各変数の関連

乳幼児との接触経験は、関係性評価カテゴリーの各得点及び質的分類における文脈焦点読み取り得点と有意な関連が見られなかった。これは、非婚男性の乳幼児との接触経験と関係性評価カテゴリーの欲求と基本的情緒で有意な相関が見られたという報告 (杉本, 2022) とは異なる結果である。ただし、親になる前であっても、乳幼児とかかわることで乳幼児に対する共感性を獲得し (小嶋, 1989)、乳児の気持ちを代弁する声かけも増加する (中川・村松, 2010) ことから、乳児の表情に対する解釈は乳幼児とかかわることで変化すると考えることは、一定の妥当性はあると考えられる。表情認知がストレスといった個人的要因から影響を受けるとの指摘もあることから、個人差要因も考慮しながら検討を重ねる必要があると考えられる。

一方で、子どもをうまく扱える自信は、対象希求の読み取りの多さと有意な関連を示した。長屋 (2009) は、対象希求の反応を示す場合、その人物は何らかの介入行動を求

められていると感じると予想され、対象希求の反応の多さは子どもとの心理的距離を反映するとしている。母親を対象にした研究でも、親になり養育経験を重ねることで、子どもへの好意感情が高まり、子どもの情緒的な相互作用に敏感になると報告されている（長屋他，2008）。一方、子どもを扱いにくいと感じているほど、同じ介入行動を求める表情でも、不満や自己主張として解釈されやすい（長屋，2009）。小嶋（2001）は、養護性はまず養護的な構えが形成され、その後技能が発達するとしている。つまり、乳幼児に対する好意的な関心が基礎にあり、そこに子どもと接する自信が高い状態にあることで、余裕を持って子どもとかわることが可能となり、子どもの表情から情緒的な相互作用を多く読み取るようになったと考えられる。

（3）まとめと今後の課題

本研究は、男性の情緒応答性の発達に関連する要因として、父親の育児関与、乳幼児との接触経験、養護性を取り上げ、非婚男性と父親それぞれに情緒応答性との関連を検討することが目的であった。父親では育児関与と乳幼児との接触経験が、非婚男性では養護性の子どもをうまく扱える自信が情緒応答性に関連することが示された。

一方、研究では親発達を横断的に検討するために、非婚男性と父親を対象とした。しかし、非婚男性が親になる過程では、結婚や妻の妊娠という経験を経ることが一般的と考えられる。つまり、本研究では親発達を検討することを目的としているものの、既婚で子どもがいない時期や妻が妊娠している時期が欠落している。新婚期や妊娠期などを対象に含めて検討していくことで、乳児の表情に対する認知的特徴との関連要因がどのように変化するのか、情緒応答性の発達に関する新たな知見を得ることができる。また、現代の父親は育児関与の実態も多様化しており、父親は二次的養育者であるという画一的な捉えで検討することに限界がある。育児に対する父親の関与のあり方や、非婚男性でも育児に対する認識の違いによる差など、現在の子育てを取り巻く社会環境に即した検討も必要であると考えられる。

参考文献

- Atzaba - Poria, N., Meiri, G., Millikovsky, M., Barkai, A., Dunaevsky - Idan, M., & Yerushalmi, B. (2010). Father-child and mother-child interaction in families with a child feeding disorder: The role of paternal involvement. *Infant Mental Health Journal*, 31(6), 682-698.
- Emde, R. N., & Easterbrooks, M. A. (1985). Assessing emotional availability in early development. In W. Frankenburg, R. N. Emde & J. Sullivan (Eds.), *Early identification of children at risk. An international perspective* (pp. 79-101). New York: Plenum Press.
- Emde, R. N., Score, J. F. (1988). 乳幼児からの報酬：情緒応答性と母親参照機能. *乳幼児精神医学*(pp.25-48) 岩崎学術出版社. (Emde, R. N., Score, J. F. (1983). The

reward of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In J. D. Coll, E. Galenson, & R.L. Tyson (Eds.), *Frontiers of infant psychiatry*. New York: Basic Books)

花沢 成一(1992). 母性心理学 医学書院

井上 カーレン果子・濱田 庸子・深津 千賀子・滝口 俊子・小此木 啓吾 (1990). 乳児の写真から情緒を認知する能力の測定-Japanese I FEEL Pictures Test-, 家族療法研究, 7(2), 114-124.

小嶋 秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 (pp.187-204) 有斐閣

小嶋 秀夫 (2001). 心の育ちと文化 有斐閣

小山 里織・森山 雅子・小林 佐知子・長谷川 有香・丸山 笑里佳 (2014). 父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連-妊娠期から生後4か月までの縦断的研究. 小児保健研究, 73(5), 680-688.

森下 葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17(2), 182-192.

長屋 佐和子 (2009). 日本版 IFEEL Pictures : 関係性評価カテゴリーによる母親標準データの分析. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 8(2), 25-31.

長屋 佐和子・濱田 庸子・井上 果子・深津 千賀子 (2008). 日本版 IFEEL Pictures の研究: 関係性評価カテゴリー作成の試み. 精神分析研究, 52(1), 18-29.

中川 愛・松村 京子 (2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動: 乳児との接触経験による違い. 発達心理学研究, 21(2), 192-199.

中西 由里・栗津 幹子 (1996). 「養護性 (nurturance)」に関する一研究: 幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較. 相山女学園大学研究論集 社会科学篇, 27, 9-18.

小原 倫子 (2010). 母子関係における情動認知の発達-生後4ヶ月から12ヶ月までの縦断研究-, 愛知江南短期大学紀要, 39, 27-37.

岡本 祐子・古賀 真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究, 4, 159-172.

Pleck, J. H. (2010). Paternal involvement: Revised conceptualization and theoretical linkages with child outcomes. In M. E. Lamb (Ed.), *The role of the father in child development* (pp. 58-93). Hoboken, NJ: Wiley

杉本 守 (2022). 親になる前の乳幼児に対する情緒応答性の発達に関する研究: 表情認知の方法における親との差異に着目して. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 22, 107-114.

Tronick, E., Als, H., & Brazelton, T. B. (1980). Monadic phases: A structural descriptive analysis of infant-mother face to face interaction. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 26(1), 3-24.